東洋文庫ミュージアム　企画展
「キリスト教交流史－宣教師のみた日本、アジア－」

会期：2024年1月27日（土）～2024年5月12日（日）
会場：東洋文庫ミュージアム
主催：公益財団法人東洋文庫、
後援：天草市、上智大学キリシタン文庫、長崎県

「キリスト教」はご存じの通り世界的な宗教ですが、その歴史をさかのぼると、東西の文化交流において重要な役割を担ってきたことに気づきます。はじめは陸路で、大航海時代には海路を使って宣教師たちがアジア諸地域に次々とやってきましたが、反応や受容のあり方は地域ごとに異なるものでした。キリスト教交流史の視点からアジアを眺めることで、かえってアジア各地の多様性や特徴が際立って見えてくることでしょう。東洋文庫は設立時からキリスト教関係の貴重書を豊富に所蔵しており、国内有数の質と量を誇ります。諸言語で編まれた多彩な作品群から、キリスト教を通じた東西交流のあゆみを追いかけてゆきましょう。

メインビジュアル

展示構成とみどころ

１．大航海時代前の宣教－モンゴル帝国が繋げた東西交易路

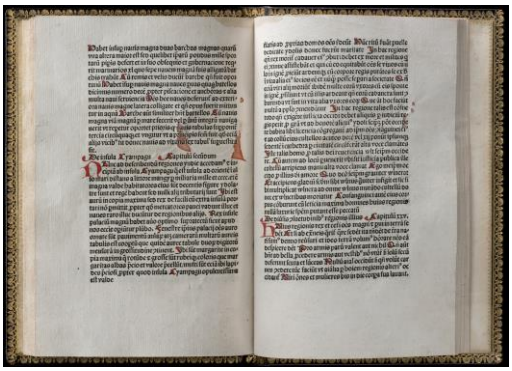
大航海時代より前、キリスト教はアジアにどのように広がっていたのでしょうか。

パレスチナの地で興ったキリスト教は周辺地域に瞬く間に広がり、5世紀には中央アジアのアフガニスタンやトルクメニスタンにも司教区をもち、ここからシルクロードなどの隊商路を使ってさらに東へ伝わりました。唐王朝下の中国にローマ帝国では異端とされたネストリウス派が伝わり、いくつかの教会（大秦寺）も建設されましたが、10世紀に唐が滅亡すると姿を消しました。

13世紀、モンゴルのチンギス・ハンが遊牧民の統一国家を創設すると、後継者たちは西は東ヨーロッパ、東は中国まで領土を拡大しました。このモンゴル帝国の統治下で東西世界を繋ぐ交易路は活性化し、様々な学術、文化、技術の交流が進みました。モンゴル帝国支配下の中国には南イタリア出身のフランシスコ会修道士、モンテ・コルヴィノが到達し、はじめてのカトリックの本格的な布教が行われました。

I.『中国図説』
アタナシウス・キルヒャー　1667年
アムステルダム刊

著者のキルヒャーはドイツ出身のイエズス会士で、ヨーロッパにおける中国研究の第一人者です。しかし、彼自身は中国へ行きたいという希望は出していたものの叶わず、ローマで中国語を勉強し、中国の地図や風俗を紹介する本書を執筆しました。図版は中国の明末（１７世紀）に長安で発見された「大秦景教流行中国碑」を紹介したページです。唐末には石碑も埋没したと考えらえていましたが、17世紀に出土すると即座にヨーロッパにも紹介され、ビッグニュースとなりました。



II.『東方見聞録』
マルコ・ポーロ口述、ルスティケッロ著　1485年　アントワープ刊

13世紀、モンゴル帝国支配下で東西交通路が整備された時代、陸路で中国まで至った有名な人物が、マルコ・ポーロです。彼が中国へ行くこととなったきっかけとして、モンゴル皇帝フビライ・ハンとローマ教皇をつなげ、キリスト教の宣教師をフビライの元へ送る任務があったことが『東方見聞録』には書かれています。同行した修道士は道の険しさに途中で帰ってしまいますが、マルコらはフビライの元に教皇からの親書や聖なる贈り物を届けることには成功したようです。

２．大航海時代－発見・征服・宣教

1517年、ドイツの聖職者マルティン・ルターがローマ・カトリック教会を強く批判したことをきっかけとして、ヨーロッパは17世紀中頃まで続く宗教改革の時代へと突入しました。カトリック教会内部はそれまでの腐敗を改革する動きを促進すると同時に、カトリックに抗議するプロテスタント運動の拡大に対抗するべく世界各地への宣教に乗り出しました。その時、海外宣教の前線に立った団体の一つが「イエズス会」です。

宗教改革より少し前、15世紀後半のヨーロッパではポルトガル、スペインを筆頭に各国が航路を新たに開拓し、外洋航海によって海外進出をはかる「大航海時代」を迎えました。宗教改革以降、キリスト教の宣教はヨーロッパ各国の世界進出、貿易と一体となって展開されました。

III.『聖イグナチオ・デ・ロヨラ伝』
ダニエッロ・バルトリ　1650年　ローマ刊

著者は17世紀に活躍したイエズス会の歴史家で、イエズス会関係者の伝記や、活動地域別にまとめたイエズス会史などをローマで執筆しました。本書は、イエズス会の創立者の一人で初代総長をつとめたイグナチオ・デ・ロヨラ（1491-1556）の伝記です。扉絵にはイエズス会による世界宣教の寓意が込められています。四人の人物はそれぞれ四大陸（ヨーロッパ・アジア・アフリカ・アメリカ）に見立てられ、彼らは天上のロヨラから放たれる光を仰ぎ見ています。

IV.『ポルトガル領アジア』
ファリア・イ・ソウザ　1666-75年　リスボン刊

本書はポルトガルの歴史家で詩人としても知られるファリア・イ・ソウザの著作です。ポルトガル人のアジア各地の進出状況が詳述されています。ポルトガル人の進出を受けて繁栄をみたアジア各地の交易都市、たとえばインドのゴア、マレー半島のマラッカ、中国のマカオなどを詳細に描いた地図も随所に織り込まれています。こうした地図には商館や教会の場所が細かく示されており、ポルトガルにとってのアジア進出が商業活動とキリスト教宣教の両輪で展開されたことを推測させます。

３．「東洋の使徒」サビエルが開いた日本宣教

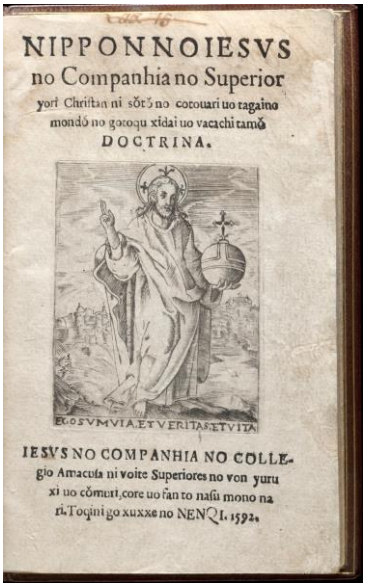
ローマ教皇庁とポルトガル王室の後ろ盾を得たイエズス会士フランシスコ・ザビエルは、1549年8月、鹿児島に上陸しました。その後約2年間にわたり九州各地と山口で活動し、日本教会の礎を築きました。

サビエルに続き、日本での布教に実績を残したのが、東インド巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノです。彼は1579年から3年間、西日本各地を視察するなかで、日本の慣わしや政治・社会状況に配慮した「適応」布教方針を打ち出し、その実践を部下に指導しました。

また、ヴァリニャーノは聖職者養成にも取り組み、各地にセミナリオ（初等教育機関）やコレジオ（高等教育機関）が開校しました。1582年にローマへ派遣された天正遣欧使節が活版印刷機を持ち帰ると、今日「キリシタン版」として知られる『ドチリーナ・キリシタン』(1592年)、『サクラメンタ提要』(1605年)など、多種多彩な書物が生み出されました。

V.『ザビエルの生涯』オラティオ・トルセリーニ
1600年　バリャドリッド刊

本書はフランシスコ・ザビエルの伝記です。ザビエルは1549年からの約2年間の滞在中、西日本各地の有力大名らと面会をして改宗をするよう積極的に働きかけました。その結果かなりの信者を獲得しましたが、日本全土へと拡大するためには、日本文化に多大な影響を与えている中国での宣教が不可欠との考えにいたります。そのためゴアに戻った後中国へと旅立ちましたが、病のために志を果たせず、1552年マカオ近くの上川島にて46年の生涯を閉じました。

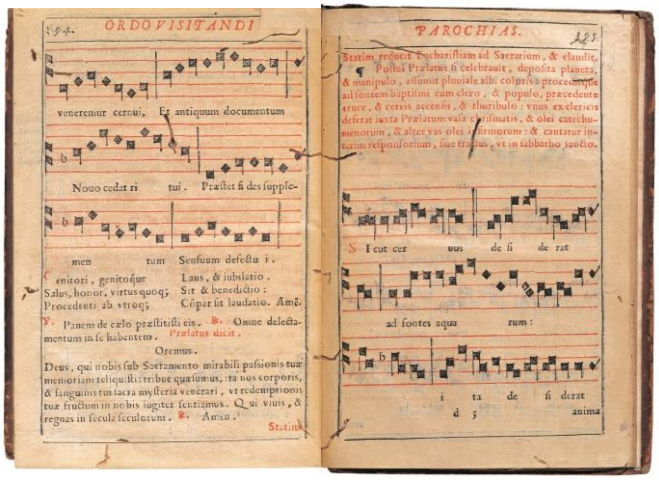


VI.国指定重要文化財『ドチリーナ・キリシタン』　1592年　天草刊

1549年のザビエル来日以降、日本でキリスト教を布教したイエズス会による出版物です。キリスト教の教義を12の項目に分けて、ローマ字表記の日本語で説明しています。イエズス会の宣教師ヴァリニャーノは、天正遣欧使節の帰国時（1590年）にグーテンベルクの活版印刷機を九州に持ち帰らせました。この印刷機により、16世紀末から17世紀はじめに印刷された書物を「キリシタン版」といい、本書はそのうちの一つです。厳しい弾圧にあったため、キリシタン版は世界にわずか30種ほどしか残っていません。

VII.『サクラメンタ提要』
ルイス・セルケイラ編　1605（慶長10）年　長崎刊

カトリックでは伝統的に、「秘せき(サクラメンタ)」とよばれる、神の恩寵を人間に与えるために教会が制定した７つの儀礼（洗礼や婚姻など）が行われてきました。本書はその手引書で、日本司教のセルケイラが編纂しました。天正遣欧少年使節の一行が持ち帰った印刷機で長崎において刷られたキリシタン版の一つです。日本の印刷史上初の二色刷りであると同時に、19曲のグレゴリオ聖歌を収めた「洋式五線譜」が掲載されている最古のものです。



VIII.『日本におけるキリスト教の勝利』
ニコラ・トリゴー　1623年　ミュンヘン刊

フランドル出身イエズス会士のトリゴーは、日本の殉教史を題材とした作品を執筆しました。ラテン語で書かれた本書は、キリシタンに対する拷問や処刑を描いた銅版画を多数収録していることで有名です。図版は、1614年11月の島原半島口之津における弾圧の文脈で現れ、信徒の集団とそれを取り囲む銃兵・槍兵・弓兵が描かれています。このとき殉教を遂げた信徒のなかには、豊臣政権の朝鮮侵攻で捕らえられた後に日本で洗礼を受けた朝鮮人も含まれていました。

4．禁教国・鎖国の日本へ

豊臣秀吉は当初、大坂城下での教会設置を許すなど、イエズス会の活動を容認していました。ところが九州平定後の1587年7月、突如として「伴天連追放令」を発し、キリスト教を「邪法」とする見方を表明します。このときイエズス会は全面的な追放を免れたものの、表立った活動の自粛を強いられました。1596年に取締りが強化された結果、宣教師とキリシタンは次々に捕えられ、1597年2月、長崎の西坂では計26名の宣教師とキリシタンが磔刑に処されました。

徳川家康も、当初は海外貿易の振興のために宣教師の滞在を黙認していましたが、カトリックに対して扉を閉ざす方向へと舵を切り、1614年1月、幕府は全国を対象とした禁教令を公布、11月には宣教師をマカオとマニラに追放しました。それ以後の宣教師とキリシタンたち活動や悲劇的結末は、ヨーロッパ各言語の印刷物から知ることができます。

IX.『日本殉教精華』
アントニオ・フランシスコ・カルディン　1650年　リスボン

本図は「マカオ使節処刑事件」を描いた銅版画です。島原天草一揆の翌1639年、徳川幕府はポルトガル船の来航禁止に踏み切りましたが、マカオのポルトガル人は長崎貿易の復活を願い、1640年に代表使節を長崎へ派遣しました。ところが徹底した「鎖国」政策の前に彼らの願いは叶えられず、ポルトガル人の使節4名と世界各地出身の随行者57名が首を刎ねられました。

5．東アジア世界に広がる新たな宣教フロンティア

中国での布教は、1580年代から本格化しました。その立役者の一人に、イエズス会士マテオ・リッチ（漢名：利瑪竇）がいます。リッチは官僚や学識者と交友を深め、彼らと漢文著作・訳書を公刊することにも努めました。またリッチは儒教の伝統に配慮した現地適応型の布教を進めましたが、この妥協的な態度はイエズス会の内外で「典礼論争」を巻き起こしました。

やがて明朝は1644年に滅び、清朝に取って代わられますが、この王朝交替の前後、西洋暦法の導入、天文器械や地図の製作、大砲の鋳造など多方面に活躍し、政府の要職に任じられた宣教師もいました。

またこの頃、新たなフロンティアとして東南アジアでは積極的な布教地の開拓がなされました。東洋文庫の所蔵する貴重書を繙くと、イエズス会による東南アジア布教史とともに、宣教師が各地で観察した自然や都市、学び取った地理・宗教・言語などの知識も見えてきます。

X.『中国新地図帳』（『新地図帳』vol.11より）
マルティノ・マルティニ　1655年　アムステルダム刊

編者のマルティニはイタリア出身のイエズス会士で、明末清初期中国で布教活動を行うと同時に、中国に関する著作を多数発表しました。本書は中国の地図をまとめたものです。扉を飾るこの図版には、様々な意味が込められているようです。イエズス会のモノグラムで飾られた太陽の光を、カトリック教会を擬人化した女性が持つ鏡で反射し、天使の持つ松明を灯します。松明は図面下のアジア地図を照らしています。天使たちはアジアへ宣教にゆく計画を練っているかのようです。

６．日本再布教の時代

幕末に外国人居留地内に限り教会の設置が認められると、横浜と長崎に教会が建設されました。そして1865年3月17日には、長崎・大浦天主堂を訪れた潜伏キリシタンが、パリ外国宣教会の神父・プティジャン（1829-84）に信仰を告白する、「信徒発見」の瞬間が訪れたのです。パリ外国宣教会は、1663年にルイ14世の勅許により設立され、インド洋から東南アジアをまたぎ東アジアにいたるまで広い領域をカバーして布教活動を行った海外布教のためのミッションです。

明治期に入ると、パリ外国宣教会の宣教師たちが日本各地での布教活動を先導しましたが、明治初期にはキリスト教に対する禁制は解かれておらず、潜伏キリシタンの中には拘留先で迫害を受けて殉教を遂げる信者もいました。1873年、西洋諸国の批判を受けて明治政府はキリスト教禁制の高札を撤去し、以後、カトリック、プロテスタントを問わずキリスト教信仰は黙認されることになりました。

XI.『パリ外国宣教会宣教地図帳』
アドリアン・ローネイ
1890年　リール刊

著者のアドリアン・ローネイ（1853-1927）はパリ外国宣教会の司祭ですが、歴史家でありアーキビストとして、『パリ外国宣教会全史』をはじめ同宣教会の布教史に関する数多くの著作を残しています。本地図帳は刊行の19世紀末時点でのパリ外国宣教会の管轄するアジア各地の代牧区（使徒座代理区）を一つ一つ取り上げ、それぞれにおける布教の歴史を紹介する内容です。地図内には教会や神学校などの所在地が示されており、各地の信仰コミュニティの規模なども記されています。

会期中のイベント

＜ミュージアム講演会＞
※参加費無料（入館料が別途かかります）

2月18日（日）　「大航海時代のミッショナリー・ロード　―東洋文庫の貴重書からその軌跡を辿る―」
講演者：阿久根　晋氏（日本学術振興会特別研究員PD・東洋文庫研究員）

3月17日（日）　「バチカン図書館蔵日本信徒の『奉答書』（1620－21）の料紙分析報告
―最新科学技術が解き明かす古文書のミクロの視点（新出史料紹介を含む）－」
講演者：川村 信三氏（上智大学教授）

4月14日（日）　「近世東アジアの政治文化とキリシタン禁制(仮)」
講演者：大橋　幸泰氏（早稲田大学教授）

4月21日（日）　「日本のイエズス会画派と東アジア：キリシタン美術の展開」
講演者：児嶋　由枝氏（早稲田大学教授）

申し込み開始日：2月1日10：00～

詳細はホームページをご覧ください

広報用画像のお申し込みについて

＜画像使用全般に関してのご注意＞
■本展広報目的での使用に限ります（会期終了まで）。使用後はデータの廃棄をお願いいたします。
■企画展名、会期、会場、画像・クレジット（所蔵先）は必ず記載してください。
■転載、再放送など、二次使用される場合は別途申請をお願いいたします。
■Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードを施し、「画像の無断転載を禁じます」旨を表記してください。
■基本情報、画像使用などの確認のため、ゲラ刷り・原稿段階のものを担当者にお送りください。
■掲載・放送後は必ず掲載紙（誌）、同録DVDを担当者までお送りください。

＜広報画像クレジット一覧＞
（１点のみ掲載の場合）公益財団法人東洋文庫蔵
（２点以上掲載する場合）すべて公益財団法人東洋文庫蔵　を必ずご記載ください。

＜広報用画像一覧＞※画像は本文をご覧ください

番号	クレジット
□Ⅰ	『中国図説』アタナシウス・キルヒャー　1667年　アムステルダム刊
□Ⅱ	『東方見聞録』マルコ・ポーロ口述、ルスティケッロ著　1485年　アントワープ刊
□Ⅲ	『聖イグナチオ・デ・ロヨラ伝』ダニエッロ・バルトリ　1650年　ローマ刊
□Ⅳ	『ポルトガル領アジア』ファリア・イ・ソウザ　1666-75年　リスボン刊
□Ⅴ	『ザビエルの生涯』オラティオ・トルセリーニ　1600年　バリャドリッド刊
□Ⅵ	国指定重要文化財『ドチリーナ・キリシタン』1592年　天草刊
□Ⅶ	『サクラメンタ提要』ルイス・セルケイラ編　1605（慶長10）年　長崎刊
□Ⅷ	『日本におけるキリスト教の勝利』ニコラ・トリゴー　1623年　ミュンヘン刊
□Ⅸ	『日本殉教精華』アントニオ・フランシスコ・カルディン　1650年　リスボン
□Ⅹ	『中国新地図帳』(『新地図帳』vol.11より)マルティノ・マルティニ　1655年　アムステルダム刊
□Ⅺ	『パリ外国宣教会宣教地図帳』アドリアン・ローネイ　1890年　リール刊
□	メインビジュアル※クレジット不要

上記資料画像を広報素材として提供いたします。
下記のURL、またはQRコードよりお申し込みください。

URL
https://qr.paps.jp/iT9a5

QRコード

03-3942-0328（TEL）　shinoki@toyo-bunko.or.jp(E-mail)　担当者：普及展示部　篠木